



TITLE:

<トピックス>「奥飛騨サイエンスツアー」取材記

AUTHOR(S):

和田, 博夫

CITATION:

和田, 博夫. <トピックス>「奥飛騨サイエンスツアー」取材記. 技術室報告 2003, 4: 29-33

ISSUE DATE:

2003-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233258>

RIGHT:

「奥飛騨サイエンスツアー」取材記

技術室（上宝観測所） 和田博夫

* はじめに

岐阜県北部奥飛騨地方に位置する上宝村、神岡町には、国立大学付属の観測施設が多く設置されています。神岡町では、ニュートリノで一躍有名になった東京大学宇宙線研究所神岡宇宙素粒子研究施設“スーパーカミオカンデ”及び東北大学大学院理学研究科ニュートリノ科学研究センター“カムランド”があり、また上宝村では、京都大学大学院理学研究科附属飛騨天文台、同じく京都大学防災研究所附属災害観測実験センター穂高砂防観測所及び附属地震予知研究センター上宝観測所などがある。この他にも隣接する丹生川村には、東京大学の宇宙線観測所やコロナ観測所があり、正に奥飛騨は科学研究施設の村である。各施設では、地元との協調関係を打ち出して、“スーパーカミオカンデ”では年1回の公開や、宇宙丸かじり講座を開催、また飛騨天文台でも一般公開を行っている。他の施設においても、地元の小中学生や団体の見学を受け入れており、地元に着した施設としてアピールしている。しかし、現状はまだ十分地元浸透していないようで、「近くにいながらあの観測所では何をしているのかわからない」といった声が聞こえてくる。このような声は当然行政サイドへも伝わっているらしく、今回の“奥飛騨サイエンスツアー”が企画されたのではないかと思う。観測施設側としては、施設をアピールすることにおいて好都合であり、企画側では、普段は見学が不可能なところを可能にするといった思惑が一致しての出発進行となったのである。

当初の企画では、神岡町及び神岡町教育委員会が主催して、各観測施設が共催となり、営業、巡検ガイド等を地元第三セクター神岡鉄道（株）に委託するというものであったが、途中より上宝村と上宝村教育委員会が主催者に加わって進んでいる。また、実施は年3回を予定しており、第一回は7月に地元飛騨神岡高校の生徒、第二回目は8月に飛騨地区の高校生を、そして第三回目は岐阜県内の高校生と富山県の高中生を対象とするというものであった。しかし“スーパーカミオカンデ”の光センサーが半数ちかく破壊するといった事故が発生したこともあって、予定時期が大幅に遅れて、最初のツアーが8月となったのである。当初は、8月1日に、“カムランド”、“飛騨天文台”、“上宝観測所”の3施設の巡検を計画していたが、予定していた地元飛騨神岡高校からの参加希望者が全くないという異常事態になり、急遽中止となった。最近の生徒の理科離れを如実に示す結果であろう。8月23日ようやく第一回のツアーが、“カムランド”、“穂高砂防観測所”、“飛騨天文台”の3施設を対象として行われた。第二回目のツアーは11月に、“スーパーカミオカンデ”を対象として実施された。

以下にそれぞれのツアーの様子を紹介する。

* 第一回ツアー（“カムランド”、“穂高砂防観測所”、“飛騨天文台”）平成14年8月23日（金）

このツアーの参加者は、吉城高校（岐阜県古川町）の1, 2年生8名で、引率は、

神岡鉄道(株) 神岡町、上宝村の関係者4名であった。日程は、午前中“カムランド”、午後一番に“穂高砂防観測所”最後に“飛騨天文台”の順であった。私は所用があって、“飛騨天文台”の見学のみを取材した。“穂高砂防観測所”の見学には同行できなかったのも、後日関係者に聞き取り取材を行ったので、まずはそちらのお話とする。

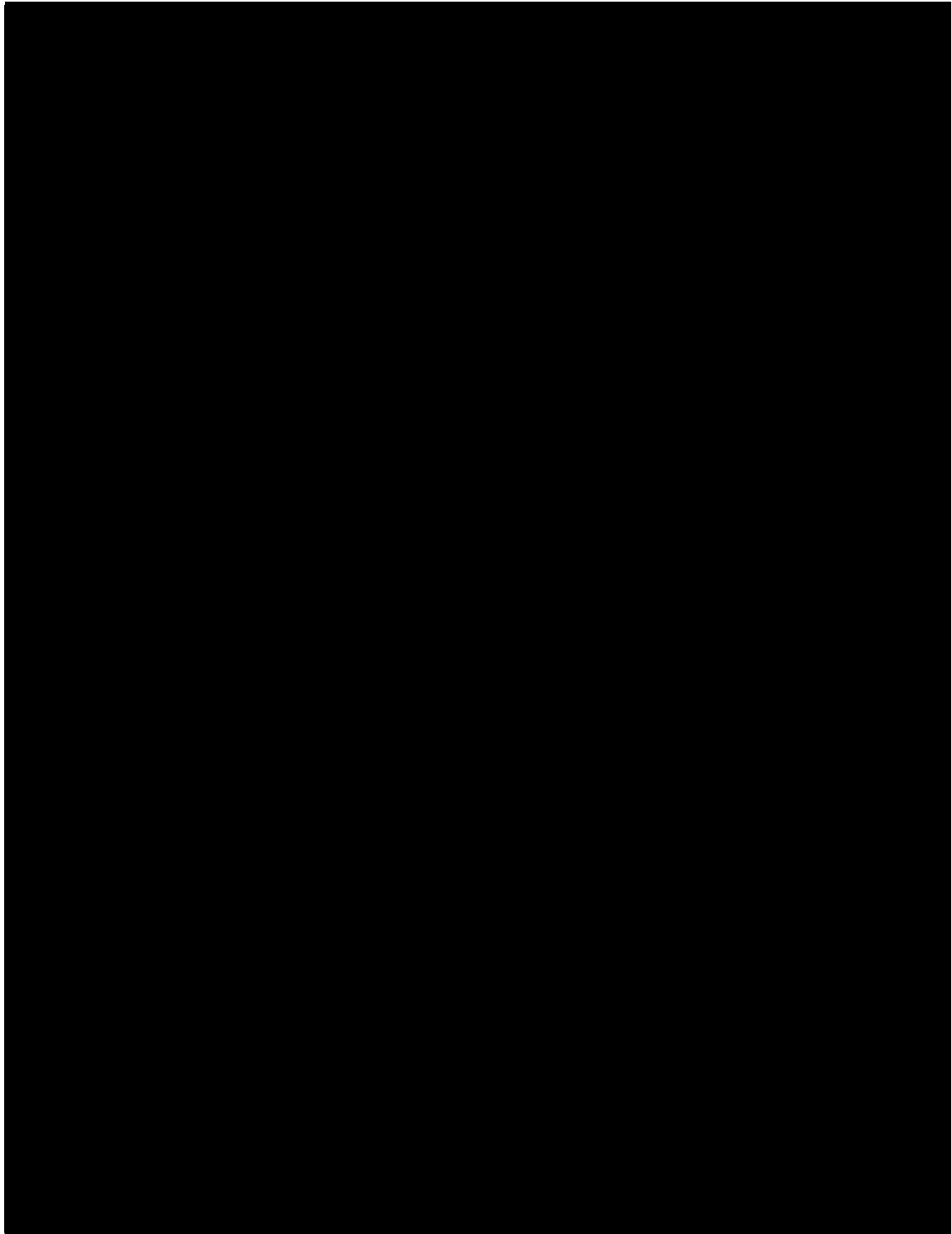
“穂高砂防観測所”の見学では、まず30分ほど室内にて沢田先生より観測所の仕事についての説明があり、その後蛭谷観測点に場所を移して、土砂流出の現場を目の前にして観測の状況を学習した。内容が難しかったのか、あるいはバス移動で疲れていたのか、室内での話しが始まるとすぐ睡魔に襲われる生徒もあったようである。事前に資料を配付して予備知識を持ってもらえたら、このようなことはなかったかもしれない。

“飛騨天文台”では、約2時間にわたって施設の紹介がなされた。まず最初に北井助教授から歓迎挨拶があり、引き続いて見学上の注意事項が説明された。その後60cm反射望遠鏡、太陽フレア監視望遠鏡、65cm屈折望遠鏡、ドームレス太陽望遠鏡の順に説明を受けた。参加者全員かなり緊張した面もちで説明を聞いていたが、60cm反射望遠鏡の説明が一段落したときに、屋外に出て天文台の施設を屋上から一望したときには、ひとときの緊張感から解放された様子が伺えた。天気がよければ遠くの山々が見られて気分爽快といったところではしたが、今回のツアーの時はあいにくの曇り空で、見通しがきかなくて残念でした。次々とそれぞれの望遠鏡の担当者から詳しい説明があった。説明者は、殆どが教官と院生であったが、その中に混じって我々と同じ技官が、これまで培ってきた知識を元に、懇切丁寧に説明していた光景が印象的であった。天気がよければ望遠鏡のドームのスリットをあけて直接観測する体験などが出来るのであるが、前述の通りの天候で、折角な機会なのに気の毒なことをしたと感じた。このことを残念だと気づいて、いずれ一人でも見学に訪れる生徒が出てくれることを期待したい。“カムランド”については、同行もしていませんし、私自信がまだ見学していませんので、全く記事にすることが出来ませんが、幸いなことに、地元新聞が掲載した記事が有りましたので、それを添付しておきます。

* 第二回ツアー(“スーパーカミオカンデ”) 平成14年11月9日(土)

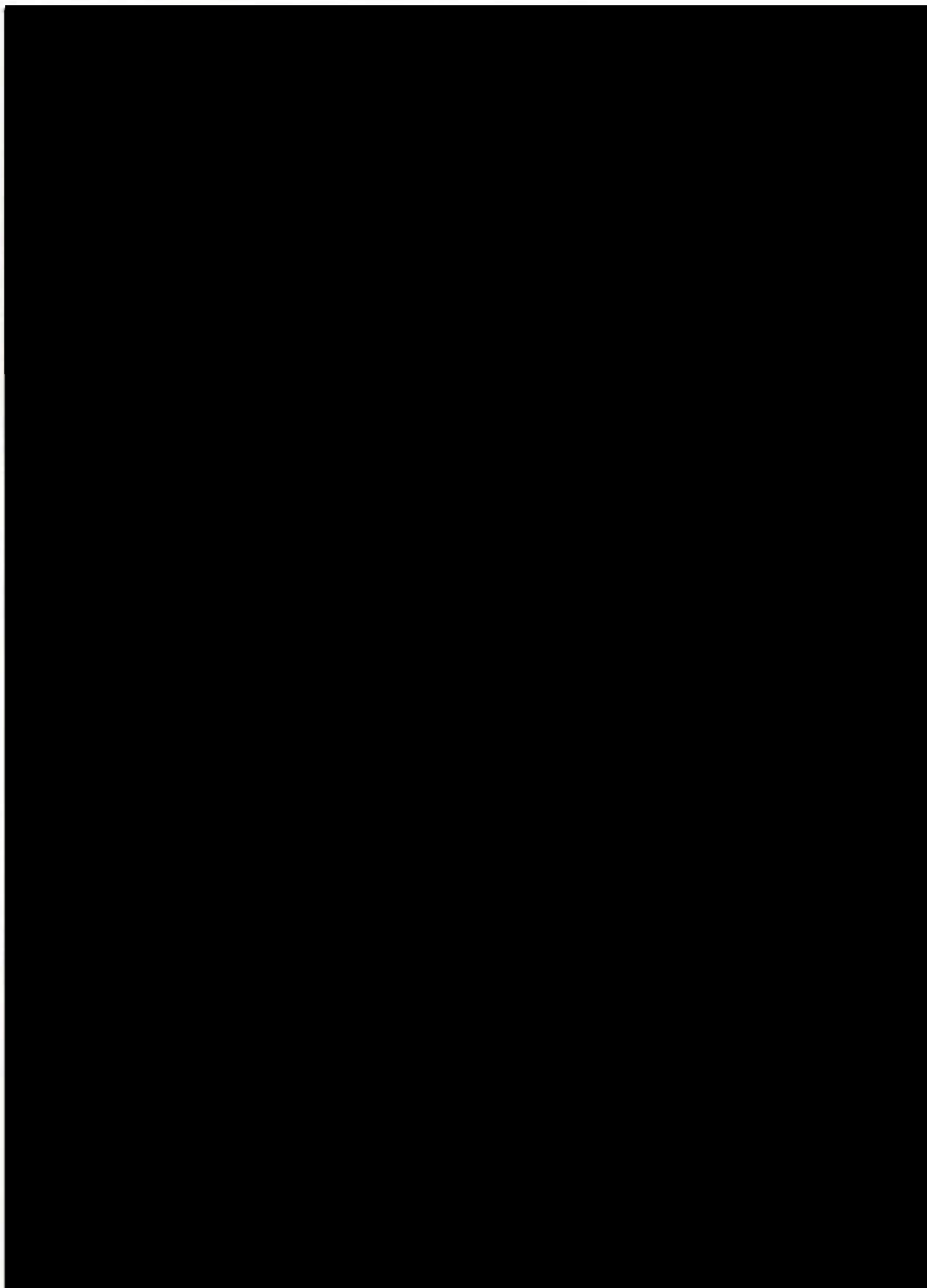
第二回目は当初“スーパーカミオカンデ”の他に“飛騨天文台”、“上宝観測所”を予定していたが、“飛騨天文台”は降雪のため移動出来なくなり、また“上宝観測所”は双方の日程が調整出来ずキャンセルとなり、“スーパーカミオカンデ”のみの見学となった。このツアーには富山県より富山高校の生徒が十数名参加したそうです。ノーベル賞の話題でもちきりのこの時期にすばらしいタイミングでの見学ではなかったかと思います。

今年度も年3回ほどのツアーを予定しているとの担当者の話でした。今年度は“上宝観測所”の見学は実現できませんでしたが、生徒の理科離れ防止の為に、また隔地施設の地元へのアピールの為に今後出来る限りの協力が必要であると考えます。



平成14年 8月25日 中日新聞より

第一回奥飛騨サイエンスツアーを報道した地元新聞（中日新聞）



平成14年 8月24日 岐阜新聞より

サイエンスツアーを報道した地元岐阜新聞記事



丁寧に施設の紹介をする石浦技官（写真上左側背面の人物）と熱心に説明に聞き入るツアー参加者（写真下）